

論文

傘の歴史と民俗3 - 飴屋の傘 -

段上達雄

【要旨】

浮世絵などの絵画資料を主に用いて、近世の飴屋の多くが奇抜な衣装や口上（呼び声・掛け声・唄）、楽器演奏、踊りなど、芸能的要素を多分に持った存在で、歌舞伎や人形浄瑠璃との親近性について触れると共に、立てた傘を標識として用いた実態とその経緯について一覽し、その象徴的意味が洒落文化に由来することを考察する。

はじめに

傘に関わる浮世絵の画像を検索している中で、傘を立てた飴屋が多いことに気がついた。

飴は商品自体が小さく、まず、一番のお得意様である子供たちとその親を集めるためには、仕掛けが必要である。路上の飴売りは目立つ衣装や大傘のような小道具、歌や踊りや演奏など、人目を引くパフォーマンスで集客する必要があった。そこで、傘がなんらかの記号的意味を持つのではないかと考え、江戸に偏ってしまうが、絵画資料を探索してみた。

(1) 大傘を立てた飴売り

大傘を立てた飴売りを描写したと思われる連歌がある。慶安2年(1649)に刊行された『西山宗因千句(宗因連歌千句)』である。その第五卷(全十卷)に「我家はから笠の下天が下(00457)」「すぐなる道をおこしあめ箱(00458)」という連歌を掲載している。これによって大坂に江戸前期から大傘を立てた飴売りがいたのは間違いないと思われる。

管見した中で、大傘を立てた飴屋の最も古い図は、延宝9年(1681)の一笑軒の自序をもつ咄本『当世口まね笑』三巻に記載された「小倉三官飴売の事」の挿図である。奥に置看板を立てた大きな床机の上に8の字形に延ばした飴や切った飴を載せて売っている。真ん中に大きく「小倉三官屋」、右脇に「本るい(類)なし」、左脇に「そらね(空値)



『当世口まね笑』

なし」と書いている。そして、床机の背後に大傘を立て、傘下に6個の小袋のようなものを吊り下げている。

(2) 店舗売りの飴

① 飴の川口屋

『御府内備考』は『新編武蔵風土記』を編纂するために安永9年(1780)から安政3年(1856)にかけて収集整理された資料で、文政12年(1829)完成の『御府内風土記』執筆のために用いられたが、『御府内風土記』は明治5年(1872)に発生した皇居の火災で焼失してしまった。

『御府内備考』に残されている文政9年(1826)の雑司ヶ谷町の「地誌御調書上」には「川口屋、飴売始は正徳年中(1711-16)の頃より、手作にて鬼子母神境内にて売始る処、殊ノ外流り」と記されている。川口屋の屋号は近くを流れる弦巻川の流れが尽きない事を祝ってつけた名で、弦巻川の弦の字を鶴と読み換え、鶴の丸を家紋とした。ところが、川口屋という屋号を名乗るようになったら、関係のない家まで川口屋と称して飴売りを始めたという。しかし、この本来の川口屋の店舗の絵は残っていない。

川口屋と表示した飴屋の絵がいくつか残されている。例えば、宝暦3年(1753)に刊行された『絵本江戸みやげ』は、浮世絵師西村重長(1697-1756)の絵を中心とした地誌だが、冒頭に記された「両国橋の納涼」では、橋のたもとの飴屋を描いている。「あめ」と書いた行灯を床机の上に据えて飴を並べ、床机の周りに「川口や」と書かれた幕を巡らせている。また、恋川好町(1753-1829)などによる寛政5年(1793)に刊行された『どうけ百人一首』にも川口屋を名乗る飴屋を描いている。その飴屋は神社の拜殿横で露店を出しており、唐草文を描いた大傘を立て、台上に飴を広げた浅箱を広げ、その台の周りに川口屋という文字と蜻唐草文を染め抜いた幕を張り付けている。

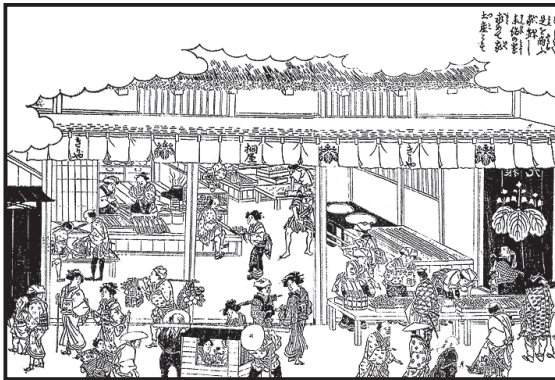
『武江年表』の「安永年間記事」に「安永十年、俳人堤亭の撰たる種おろしと云句集に載る所の、其時代のはやり物商物目録左に略記す」という記事があり、菓子屋、大仏餅、軽焼などと共に「飴目黒桐屋、雑司ヶ谷川口屋」と記されている。安永10年(1781)には、目黒の桐屋と雑司ヶ谷の川口屋は、江戸の飴屋を代表する存在だったことがわかる。



『絵本江戸みやげ』
「両国橋の納涼」部分

②目黒飴の桐屋

飴販売は必ずしも露店商だけではない。立派な店構えで飴を売る商店もあった。天保5（1834）に刊行された『江戸名所図会』巻之三「天磯之部」の目黒不動の最後に「門前五、六町が間、左右貨食店軒端をつどへて詣人をいこはしむ。粟餅・飴、及び餅花の類を鬻ぐ家多し」と記して、^{あきないみせ}飴屋の店頭を見開きで描いている。その絵の中に「目黒飴此地の名物として是を商ふ家多し、参詣の輩求めて家土産とす」と書かれている。「桐屋」「きりや」という文字と五三桐紋とを染めた水引暖簾を店頭の軒端に掛け、店の右端には「元祖」という文字と五三桐紋を染め抜いた大きな日除け暖簾を下げ、目黒不動の参拝客が多数訪れて繁盛する目黒飴の桐屋の様子を描いている。



『江戸名所図会』「目黒不動」に描かれた目黒飴の桐屋



『名物鹿子』の目黒の飴

これより約百年ほど昔、享保18年（1733）に刊行された『名物鹿子』には「目黒の飴」と題した俳諧と絵が掲載されている。小店の店先で主人らしき男が諸肌脱ぎで飴を伸ばしている図で、丸に五徳柏紋と「川口や」「かはくちや」という屋号を染め抜いた軒暖簾を掛けている。この時期は川口屋を名乗る小店の飴屋が目黒飴を製造販売していたのである。店売りのせいか、いずれも大傘を立ててはいない。

（3）傘立て飴売りの広がり

①上方の飴屋

上方では元文4年（1739）に刊行された『絵本御伽品鏡』の「天満飴売」の図がある。飴入りの桶を入れた担ぎ紐付きの箱を置き、短冊や造花を下げた大傘を立て、締太鼓を左手に持って叩き、左手に持った太鼓を右手の撥で叩く2人の男の姿を描いている。笠を被った男たちの、「天満飴売 やんりや こりやこりや こりや てんまの 菊やとて かくれも無 あめがしたかな」という口上を記している。飴売りに3人の母子連れが近寄ってきている様子も描かれている。これは大坂の飴屋の絵である。当時、菊や（菊屋）という飴屋が天満町の露天で天満飴を売っていたのである。この頃既



『絵本御伽品鏡』天満飴売

に露店の飴売りが標識としての大傘を立て、歌と太鼓という芸で人を集めていたことがわかる。

②唐人飴売り

18世紀初頭頃、唐人飴売りが登場する。図は明和7年(1770)頃に刊行された『一蝶画譜』である。英一蝶(1652-1724)の原画で、挿図を鈴木鄰衞が描いている。飴売りは朝鮮通信使の姿を真似て、つば広のとんがった唐人帽子を被り、中国風の団扇を持って踊っている。大傘は立てていないが、四角い箱の上にラッパを吹く人形と幕を張り巡らせた小さな傘を立てている。飴は蓋付きの桶に入れ、箱と桶を天秤棒で担いで移動するようである。唐人飴売りは明治初年まで続く息の長い飴売りだった。



『一蝶画譜』唐人飴売り

②飴売り土平

近世中頃、飴売りのスーパースターが江戸に登場する。飴売り土平である。大田南畝が^{ちくら}舂羅山人^{あめうりどへいがでん}という名で明和6年(1769)に『売飴土平伝』を出版した。それも挿絵は鈴木春信。当時としては超豪華キャストによって作られた滑稽本である。原文は漢文で返り点と片仮名を添えているが、読みやすくするため、冒頭部分を読み下してみよう。「売飴土平伝 土平は奥州の人なり。頭に^{つぎん かぶ}帽を戴り、口に歌を唱ひ、飴を^{とら かは はおり}東都の市に売る。皐の比の外^{ふんどし ひぢりめん かさぼこ}套は鬼の犢鼻と疑ひ、紅綯紗の蓋^{おにくび}は祭の警固に似たり。紋に鬼首^{ひいらぎ}と^{どへどへ}枸骨を描き、衣に土平土平と^{たまたま}書く。偶、飴を買ふ者有れば、^{すなわち}則^{どへどへ}新歌一曲節するに、土平土平を以てす。故に其の土平たる、^{あらわ}最も著る。五尺童子と雖も、其の歌を口にせざるは莫し」とある。



『売飴土平伝』

土平は頭巾を被り、虎皮の羽織を着て、幕を張り巡らせた緋縮緬の華やかな傘を片手に持ち、合の手で「ドヘドヘ」と連呼しながら歌ったのである。2歳児でもそれを真似て歌うというのである。まるで、テレビのコマーシャル・ソングを幼児が憶えて歌うのと全く同じである。その人気は抜群で、「東面して売れば、西の街怨み、南面して売れば、北の巷怨む」ほどだったと書

いている。土平を描いた挿絵の賛は「伝誦の土平高名の歌飴 啼く児も能く止まり 大人も嘗めんと欲す」と、子供だけではなく、大人も土平の飴をなめたいと思うほどだったというのである。土平は幕を巡らせた傘を右手で差しているだけだが、傘と飴売りとの関わりが深いことがよく分かる。実はこの滑稽本の副題は「笠森阿仙附」といい、笠森お仙（1751-1827）も紹介している。お仙は江戸谷中の笠森稲荷門前の水茶屋鍵屋の看板娘で、浅草寺奥山の楊枝屋の柳お藤、二十軒茶屋の水茶屋の蔦屋およしと共に明和三美人として、もてはやされた女性である。飴売り土平と笠森お仙は、当時の江戸の親爺アイドルと娘アイドルの双璧だったといえるだろう。

（4）蛸唐草と飴屋

『どうけ百人一首』は寛政5年（1793）に刊行された小倉百人一首をもじった狂歌集で、ここにも飴屋が描かれている。飴屋は川口屋という文字と蛸唐草文様と染め抜いた幕を、飴を並べた箱の周りに巡らせ、蛸唐草を描いた大傘を立てている。この蛸唐草文は、他の絵画資料でも見られる。

飴屋たちが川口屋の店名を勝手に名乗っていたのか、それとも川口屋が飴を小売商たちに卸していたのか、その関係は不明だが、川口屋が飴屋のブランドになっていたこと、そして露天での飴売りでは、立てた大傘が飴屋の表徴になっていたことは間違いないと思われる。

寛政5年（1793）の黄表紙『昔語銚子浜』の飴売りは唐草文の大傘の下に飴を載せた台を置いて商っている。その台に桐紋と「桐屋」という文字を染め抜いた暖簾を巡らす。森羅亭萬宝が文章を書き、歌川豊国が絵を描いている。この大傘の下での飴売り以外に、巻末に傘を差した飴売りの図もある。寛政年間（1789-1801）に江戸で「小僧飴」を売り歩いた少年姿の飴売りで、寛政6年（1794）から7年にかけて銚子で鯛の大漁となった時に疱瘡が流行し、疱瘡の呪いとして口上を歌いながら、渋唐傘を差して傘の柄を叩いて調子をとって売り歩いたという⁽¹⁾。挿絵に記された口上は「ソレきただゝ子 これみてかいな このほんかうものなア しあわせかなおるストントンヨ（ソレ来た駄々っ子 これ見て買いな この本買う者なア幸せが治る ストントンヨ）」という。



『どうけ百人一首』



『昔語銚子浜』唐草文の大傘



『昔語銚子浜』小僧飴

『絵本狂歌山満多山』は享和4年(1804)刊行の大原亭炭方の撰した狂歌集で、葛飾北斎が挿絵を描いている。その第三集に雑司ヶ谷鬼子母神近くの飴細工屋を描いている。飴細工は和鋏と素手、それに細竹で息を吹き込んだりするだけで、飴をさまざまな形に作り上げ、食紅で彩色する。その細工そのものが人を呼び集める力があるため、派手な扮装や大傘などの標識は不要だった。ただ、この飴細工職人の背景に大傘を立てた飴屋が描かれているのに注意したい。大傘から垂らしているのは飴の包紙で、飴の入った箱の外側に蛸唐草の幕を張っている。



『絵本狂歌山満多山』

葛飾北斎が文政8年(1820)頃に描いた錦絵『新板大道図彙』「四ツ谷」にも飴屋が登場する。大傘を立てた飴屋が飴を並べた箱の奥に座っている絵である。箱にはちゃんと蛸唐草を染め抜いた幕を巡らせている。その前を馬で駆けぬける武士、恵比須舞の男、男の子を背負った母親、眼鏡の行商人、それに道行く二人組の男を描いている。

文政8年(1825)『今様職人尽歌合』の中に飴売と水売を詠んだ一組がある。飴売の絵では、大傘に蛸唐草と木瓜紋を描き、床机に垂らした暖簾には蛸唐草と「砂屋」と書いた額の絵を染めている。



『新板大道図彙』四ツ谷



『今様職人尽歌合』

『東都歳時記』は天保9年(1838)に刊行された墨摺絵本で、挿絵は『江戸名所図会』の図を描いた長谷川雪旦とその子雪堤が描いている。11月15日の「嬰兒宮参」での神社境内の雑踏を描いている。嬰兒宮参とは現在の七五三のことである。境内参道脇の飴屋は蛸唐草文を描いた大傘を立て、台上に唐人飴と書いた扇形の額を載せて飴を商っている。以上のことによって18世紀末から19世紀前半頃には蛸唐草が飴屋を表す文様となっていたことがわかる。蛸唐草文様は

江戸後期には飴屋の標識のひとつとなっていたようである。当然、例外もある。先の小僧飴もそうだが、蜻唐草文を用いていない大傘の下で商う飴売りもいた。文政13年(1830)に刊行された十返舎一九作画の『金儲花盛場』にも大傘を立てた飴売りの姿が描かれているが、傘にも暖簾にも唐草文は見当たらない。



『東都歳時記』 嬰兒宮参



『金儲花盛場』

(5) 近世流行商人狂歌絵図に見る飴売り

滝沢馬琴による『近世流行商人狂歌絵図』(国立国会図書館蔵)は、『流行商人絵詞二十三番狂歌合』ともいい、天保6年(1835)に刊行されたもので、行商人の姿を描き、それぞれ特有の物売りの口上を記している。その口上は単純で短いけれども、人集めのための一種の芸能的な役割も担っていたと思われる。馬琴が『近世流行商人狂歌絵図(以下商人狂歌絵図とする)』に選んだ業種には、八百屋や魚屋などの何の変哲も無い棒手振りたちは入っていない。それぞれ独特な口上や

表：近世流行商人狂歌絵図の業種

	業種と特徴	業種と特徴
飴	お駒飴 【傘立て】	三番叟売(糸操り人形)
	飴こ買いな飴【傘立て】	蝶々売
	唄念仏飴 【傘立て】	亀山のお化
	三吉飴 【傘立て】	お猿めでた
	どんどん飴 【扮装】	与勘平膏薬
	狐飴売 【扮装】	からんぼう薬
菓子・食品	三間張おじいあめ	朝鮮の弘慶子【傘持ち】
	茶碗果子売	熊の伝三膏薬
	粟の岩おこし	徳平膏薬 【傘持ち】
	曲突心太売	榛田稻荷代垢離願人
	七色唐がらし売	小僧勸化(托鉢行)
	枇杷葉湯売	

扮装、踊りなどで、人を招き寄せる行商人を選んでいる。その業種は「お駒飴」「与勘平膏薬」「飴こ買いな飴」「朝鮮の弘慶子」「唄念仏飴」「七色唐がらし売」「茶碗果子売」「お猿めでた」「熊の伝三膏薬」「三番叟売」「蝶々売」「三間張おじいあめ」「枇杷葉湯売」「粟の岩おこし」「徳平膏薬」「亀山のお化」「榛田稻荷代垢離願人」「どんどん飴」「小僧勸化」「曲突心太売」「三吉飴」「狐飴売」「からんぼう薬」の23種で、その内訳は、お駒飴などの菓子食品12種、三番叟売(糸操り人形)などの玩具4種、朝鮮の弘慶子などの薬5種、小僧勸化(これだけは行商ではなく、僧侶の勸進行)などの2種である。江戸の行商人の職種の中には、独特な扮装と持物、それに売り声を持つ

者がいたのである。この23種の商人のうち、「朝鮮の弘慶子」と「徳平膏薬」は手に持った傘を差している。「どんだん飴」「狐飴売」「三間張おじいあめ」以外の「飴こ買ひな飴」「お駒飴」「唄念仏飴」「三吉飴」は飴を入れた箱や桶に傘を立てている。

飴売り7種のうち4種が傘を立てているのである。これから『商人狂哥絵図』に掲載された飴売りをたどると共に、他の資料でどのように扱われているかを見ていこうと思う。

飴こ買ひな飴

『商人狂哥絵図』では、「あめこかひな飴(飴こ買ひな飴)」の飴売りは次のような口上を述べている。「あめこかひなよ あめかひな いちもんこやにもんこじや おとりこがねへ 大こんばたけのまん中で せきたかふてくりよとて、わしよだまいた あゝわしよだまいた おとりはあめの サアおかいなさい おかいなさい 御あいきやう おかひなさい(飴こ買ひなよ、飴買ひな、一文こや、二文こじや、踊りこはねえ、大根畑の真ん中で、雪駄買うてくりよとて、儂を騙した、ああ儂を騙した、踊りは飴の、サアお買ひなさい、お買ひなさい、御愛敬、お買ひなさい)」というものである。飴売りは黄八丈の着物に浅黄の格子模様の袖無し羽織を着て、白い股引を穿いて草履を履く。頭には浅黄色の頭巾を被る。右手に持った開いた扇で、舌を出した口元を隠して、右足を挙げて踊っているようである。箱は浅黄と白色の碁盤目模様で、その箱の隅に傘を立てている。傘も浅黄色で赤い幕を巡らす。全体に浅黄色を基盤にした赤や黄色と派手な装いである。

安永5年(1776)に刊行された柳川桂子の黄表紙『豊歳銭塚之由来』でも飴こ買ひな飴の飴売りが登場する。鳥居清経が挿絵を描いている。飴の入った四角い箱の真ん中に幕を巡らせた傘を立てている。飴売りは頭巾を被り、袖無し羽織を着て右手右足を挙げて踊っている。その飴売りの周りを4人の子供たちと幼児を肩に乗せた女が取り囲んでいる。周囲には次のような唄を記しており、飴こ買ひ

な飴売りの図であることがわかる。「あめこかいなよ あめかいな じよじよや じよやじよや じよやむすめだよ あめこかかねハ おどりこハねへ 一文こや二文こでハおどらねへ 五文こや八文こでなけりやおどらねへ あめこかいなよ あめかいな われあめこかうなら おどりせう さあさあ(飴こ買ひなよ、飴買ひな、嬢々や、嬢々や、嬢や娘だよ、飴こ買わねば、踊りこ



『商人狂哥絵図』あめこかひな



『豊歳銭塚之由来』

はねえ、一文こや二文こでハ踊らねえ、五文こや八文こでなけりや、踊らねえ、飴こ買いなよ、飴買いな、われ飴こ買うなら踊りしょう、さあさあ)」

飴こ買ひな飴の口上が少し違っている。こちらでは一文や二文の買い物では踊らないが、五文や八文になれば踊ると明確に言っているのである。

飴こ買ひな飴については『燕石雑志』巻三・八「四時代謝」に「安永のはじめ、あめこかいなと唄いて躍る飴売ありきこれも人のよく知りて童はとも
しじのゆきかい
にうたへり」と記されている。『燕石雑志』は文化8年(1811)に刊行された滝沢解(馬琴)の随筆で、これによれば、飴こ買ひな飴は安永年間(1772-81)初頭に始まったというのである。

文政10年(1827)の『盲文画話』にも「あめこかいな」の飴売りの絵が載せられている。浅黄色の頭巾と袖無し羽織を着た飴売りが踊っている様を描いており、飴を盛った箱の傍らには、赤い幕をつけた浅黄色の傘は閉じられたまま置いてある。

『盲文画話』は水野廬朝が文政10年(1827)に書いた26種の職業を絵と文章で記したもので、その中に「仙台土平飴」「おこま飴」「あめこかいな」の飴売り3人の絵がある。



『盲文画話』あめこかいな

お駒飴

『商人狂哥絵図』に描かれたお駒飴の飴売りは、鬘の先を長く伸ばして蜻蛉のような飾りをつけ、虎皮模様の袖無し羽織を着て、右手に持った扇子で口を隠して口上を述べている。

『燕石雑志』に「お駒飴」について次のように記されている。「是は安永六七年の事と覚也、此のち又お駒飴とて、飴売る筈を肩にし、鬘をいと長くして蜻蛉のとまれるようにしたるもあり。起と言は堺町なる操芝居にて、昔、黄八丈といふ浄瑠璃節をせるも、これより奴も一句づゝ口吟たる」
ヒトクチ クチスサミ

「お駒飴」の名称は『燕石雑志』が紹介した「黄八丈といふ浄瑠璃節」に由来するが、正確な外題は『恋娘昔八丈』で、人形浄瑠璃の演目である。『恋娘昔八丈』は松貫四と吉田角丸の合作で、安永4年(1775)江戸外記座において初演された。



『商人狂哥絵図』お駒飴

登場人物の材木問屋城木屋の娘お駒の台詞を飴売りの口上の一部に用いたために、お駒飴とい

う名称になったという。人形浄瑠璃上演後2～3年後にお駒飴が登場したのである。

『行商人狂哥絵図』によれば、その口上は「おぢや ぢやぢや、さんべら ぼんぼん、役者こはいろ、おこのみ次第、しほから声で、じやみつつら、いろはくろいか あめは太白、かわぬおかたは きこえませぬ、才三さんでは、ないかいな (おぢや ぢやぢや、さんべら ぼんぼん、役者声色、お好み次第、塩辛声で、じやみつつら [あばた面)、色は黒いが、飴は太白、買わぬお方は聞こえませぬ、才三さんでは、ないかいな)」というものだった。最後の「聞こえませぬ」と「才三さんではないかいな」がお駒の台詞で、ここは人形浄瑠璃の人気演目の台詞の流用なのである。

馬琴が『燕石雑誌』で指摘したように、虎皮模様の袖無羽織は土平飴の影響だろう。天秤棒のついた手桶一荷に飴を載せている。その手桶の角に蛇の目傘をくくりつけているのである。

『盲文画話』の「おこま飴」の飴売りは傘を伴わず、服装や髪型なども違っている。虎の縞模様の被り物を頭上に載せ、独楽模様の袖無し羽織を着用し、笈のように背負う箱の前で、両手を握りしめて天を仰いでいるように描かれている。飴の入った箱には大きく「お駒飴」と書いており、箱の上の台には飴が載っておらず、販売中の姿とは思えない。



『盲文画話』おこま飴

このように、同一の飴を売る飴売りの中には、扮装や傘の有無など違いのある者もいることには注意しなければならない。

唄念仏飴

唄念仏飴の飴売りは僧侶に似た姿だった。唄念仏とは唱導形式の念仏が次第に門付芸として節がついて俗曲化した歌である。

『商人狂哥絵図』によれば、彼らが唱えた唄念仏は「これは江戸中御ひやうばん (評判) の なまいだぶ なまいだぶ おひでなさひ おひでなさひ チヤチヤチヤン さて当世のたてもの (立者) は、仲蔵幸四郎半五郎、ひいき (最真) いち川團十 (市川團十郎) は 本場についてのおやぢかぶ (親爺株) そのくせとし (年) は わかアいだア (若あいんだあ) わかアいだんあアゝアゝ わかいだア ひやうばん (評判) ひやうばん」という。



『商人狂哥絵図』唄念仏飴

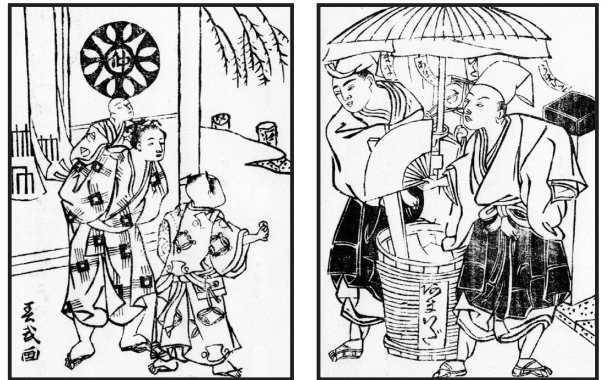
口上の「たてもの（立者）」とは立役者のことで、「仲蔵幸四郎半五郎」とは中村仲蔵、松本幸四郎、坂田半五郎などの歌舞伎役者のことである。天秤棒で運んできた手桶の上に飴を載せた板を置き、赤い短冊を垂らした青い大傘を手桶に結びつけて立てている。2人の飴売りは浅黄色の頭巾を被って墨染めの腰衣をまとい、一人は浅黄色の短衣を着て扇子を持って唄念仏を唱え、もう一人は小さな鉦を横に二つ連ねた「二丁吊り」という楽器をを叩いて拍子をとっている。なお、二丁吊りとは六齋念仏踊り⁽²⁾で用いられる鉦である。

『燕石雑志』に「あまいだ節といふ小唄をうたひ、栲の浅黄なる頭巾を戴き、腰衣をきて鉦をならし、二人にて一荷の擔をさし擔ひて街路を売あるく飴商人ありき」と記されている。あまいだ節というのは「南無阿弥陀仏」の阿弥陀仏を「甘いだ」ともじったものである。

なお、『商人狂哥絵図』と『盲文画話』の「あめこかいな」や『商人狂哥絵図』の「お駒飴」の飴売りも浅黄色の頭巾を被っており、この頃の飴売りの衣装の特徴のひとつだったと考えられる。

『放屁論後編』は風来山人（実は平賀源内）が、安永6年（1777）に刊行した戯作で、歌念仏飴について次のように記している。「空也上人の鉢扣。茶筌売より思ひ付。哥念仏を趣向して。六字を飴にねりませ。うまいだ。うまい陀仏うまいだより様々の替唱哥。扱当世の立者ハ仲蔵幸四郎三五郎また半頭のきく者ハ。時に大谷友右衛門。最負市川團十郎ハ木場についての親爺分。その病年ハ若いだ。若い陀仏 若陀と売歩き。大評判に預りし」とある。なお、三五郎とは歌舞伎役者の嵐三五郎のこと。平賀源内は空也上人の鉢扣や茶筌売から思いついたというが、唄念仏飴は、大傘や僧形などから、江戸の庶民にとって身近な住吉踊りの影響と考えた方が

良いのではないだろうか。



『放屁論後編』歌念仏飴

文化年間（1804-18）初頭、歙形蕙齋が描いた『職人尽絵巻』一卷に、「醴（甘酒）売り」「心太売り」、それに屋台の「飴売り」と共に「唄念仏飴」の飴売りが登場する。『職人尽絵巻』には職名などは書かれていないが、飴売りたちが僧侶姿を基本としていること、大傘を立てていることなどから、「唄念仏飴」の飴売りだと考えられる。

「唄念仏飴」の飴売りは二人組で、派手な模様の浴衣らしい着物を着て、僧侶用の饅頭笠を被っている。一人は二丁吊りを叩いており、もう一人は頬に当てた右手の肘を左手で支えて、唄を歌っている。その歌詞と思われる次のような文章が絵の左側に記されている、「京の女郎によしはらのほりもたせて、なかさきのいしやうてたちて大坂のあけやてあそふゆめを見た。あまいたへ、

いさ〜子ともしゆうかはしまへ(京の女郎に吉原の針を持たせて、長崎の衣装で立ちて、大坂の揚屋で遊ぶ夢を見た。甘いだ[阿弥陀の転訛])甘いだ、いざいざ子供衆、買わしまえ)」

二人の飴売りの間には、飴を並べた大きな箱一荷を置いて傘を立て、傘の下に飴の包み紙が何枚も吊り下げている。



「職人尽絵巻」唄念仏飴

三吉飴

『商人狂歌絵図』の三吉飴売りの図は、脚付きの桶に飴を並べ、桶の傍らに傘を立てている。縞木綿の着物を着た男が鉦を叩き、浅黄色の頭巾を被り、赤い縁取りをつけた縞木綿の着物と緑色の羽織を着た子供が踊っている。その口上は「はるの日くらし あすか山 ぬしに王子の花さかり 夏は両国高なわに はな火〜の すずみふね さん吉がてんか すべるな どつこい おうさて がてんた〜 (春の日暮らし、飛鳥山、主に王子の花盛り、夏は両国高輪に、花火花火の、涼み船、三吉合点か、滑るな、どつこい、おうさて、合点だ、合点だ)」というものだった。

後半の解説に「此三吉はめの子(女の子)、之こ(子)をもって、世渡りにせしかば、算盤なしにつけたる、めのご勘定さもあるべし。日毎におとり(踊り)くらしたる。唄念仏飴の売りためのおあしつかれ、はなしても三百里にむかはんとなり。右は亦うきたる親をいましめて、飴にまふる(まぶる)粉に子を憐れむ。是もまた味ひあり。おや子商売、相もちのたかひ(互い)むりなき、持たるへし(べし)」と記されている。三吉に扮しているは女兒であり、父と娘との組み合わせで、歌と踊りによって人を集めて飴を売っていたのである。



『商人狂歌絵図』三吉飴

傘を伴わない飴売り

『商人狂歌絵図』には「狐飴売」「どんどん飴」「三間張おじいあめ」という傘を伴わない飴売りの姿も描かれている。

「狐飴売」の図は見開きで描かれ、右頁には飴を並べた高脚の桶の傍らで、筒袖の白い上衣に白の股引を穿いて白い帯から白い尾を垂らした飴売りの男が踊っている様子を描く。左頁には二人の子供が走り寄ってくる様を描き、「おい こんこんよ あめをくんねへ あのさまを見る



『商人狂哥絵図』 狐飴売

同 どんどん飴

同 三間張おぢいあめ

だれがこはがるものか よしねへな あめと見せて 馬のふんだも しれねへにヨ」と子供たちの文句を書いている。『商人狂哥絵図』の後半の解説に「此狐飴うりは、いつれの頃に出たるにや、しばしば人にたつぬれとも（尋ぬれども）、しるものなし。或はいふ。こは享和年間（1801-04）、太郎稲荷のはやりしころ、かゝるあき人（商人）ありけるとぞ」と記されている。なお、太郎稲荷は柳川藩立花家の中屋敷に祀られていた神社で、現在の台東区東上野に現存する。

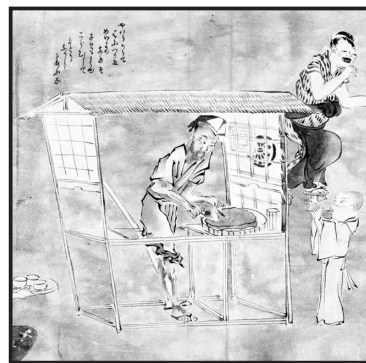
「どんどん飴」の飴売りの左側の男は右手に持った太鼓をたたき、右の男はラッパを吹いている。そして、担い棒で担いできた箱の上に四角い板を載せて飴を並べている。午後2時頃の飴売り同士の会話が次のように記されている。「まだ子どもが 師匠さまから かへるめへ 今に八ツだから こころ（ここ？）へおろして はじめよう はじめよう」寺子屋帰りの子供たちが帰る前なので、ここに荷を下ろして売り始めよう、という意味である。

「三間張おぢいあめ」は、一荷の桶の上に四角い板を載せて飴を並べ、片肌脱ぎで天秤棒で運んでいる飴売りの姿を描いている。その上部に「おぢいがきたぞ（小父が来たぞ）おぢいがきたぞ さんげんばり（三間梁）いつほん四もん（一本四文）すてきにながい（素敵に長い）おぢいがきたぞ」という口上を記している。三間張とは本来は長さ約5.4mの三間梁のことである。『商人狂哥絵図』の後半の解説に記された右方の狂歌に「あめうり（飴売り）の九尺店よりいで（出で）ながら、三間はりはかけねなるへし（三間梁は掛け値なるべし）」とあり、裏長屋である飴売りの家の間口は九尺（約2.7m）で、そこから三間（約5.4m）の長さの飴を持つてくるというのである。

『商人狂哥絵図』を中心にさまざまな飴売り紹介してきたが、ほとんどの飴売りが特別な扮装をして、口上や楽器演奏で人集めをしており、また、傘が飴屋の標識として認識されていたことも間違いのないであろう。

(6) さまざまな飴売りたち

唄念仏飴は既に紹介したが、「職人尽絵巻」に簡素な屋台の中で飴売りが飴を練っている図もある。傍らの詞書は「やはらかくてはにつかぬめいよのあめそ。子ともしゆこらむしてよたりなかつたまふな（軟らかくて歯につかぬ名譽の飴ぞ。子供衆。子らむして、余たり泣かしたまうな）」である。このような客寄せの扮装や装置もない飴売りもいたのである。また、上品な詞書は口上とも思えない。



「職人尽絵巻」屋台の飴売り

とっかえべえ（取替平）

文政13年（1830）の喜多村信節（1783-1856）の『嬉遊笑覧』には「今、江戸に飴と古きせるなどをかえにあるく者あり。とっかえべえと名づく。そのことばに『めげたらしよ、きせるの古いのととっかえべえにしよ』と呼ぶ」とある。「とっかえべえ」は飴を売るのでなく、壊れた道具と飴とを物々交換するという商売だった。

きんせいあきないづくしきょうかあわせ
『近世商賈尽狂歌合』に「取替平」の姿が描かれている。石塚豊芥子（1799-1862）が、嘉永5年（1852）に書いた狂歌の職人歌合で、12番24種の職人を載せている。その中の三番に「お万か飴」、七番に「飴曲吹」、そして、九番に「取替平」という飴屋を取り上げている。取替平の絵と共に「きせるの潰れでも 釣鐘のこわれでも 鼈甲の折れても めげつたらもてきナ とりかへやいにしよ（煙管の潰れでも 釣鐘の壊れでも 鼈甲の折れても めげつたら[壊れたら]持って来な 取り替え合いにしよ）」という口上を記す。『嬉遊笑覧』とは違う口上もあったのである。

男は左手に鉦を捧げ持ち、撞木で叩きながら口上を声高に叫んでいる。高脚の桶に飴を並べ、切り分けるための包丁を載せ、竹を桶に縛り付け、その竹に傘の柄を差し込んでいる。傘には紙製の煙草入れと思われる物などが吊り下げられており、飴以外の交換品だと思われる。交換品の中心は飴であり、傘を標識にしている点では、飴売りの範疇の中に入るだろう。当時、江戸はリサイクルシステムが整った都市で、壊れた道具を捨てずにリサイクルし、その交換品が主に飴だったことは興味深い。



『近世商賈尽狂歌合』取替平

（7）飴屋を演じた歌舞伎俳優

おまんが飴

おまんが飴は大傘を立てない飴売りである。ただし、女装して笠を被った男が「〜かわいいけりやこそ 神田からかよふ にくて かんだからかよわりよか おまむのあめじやに 一つてふが 四もんじや（〜可愛いけりやこそ、神田から通う。憎くて、神田から通わりよか。おまんの飴じゃに、一丁が四文じゃ）」と歌いながら、誇張した女の仕草をするという芸で人を集めた。石塚豊芥子も興味を持ったらしく、『近世商賈尽狂歌合』後半の解説で「おまんのあめもと屋根職人なり。当時四ツ谷鮫ヶ橋住居ト云。当時はやりものの随一なり。その音声いやみなる身ぶり、また外ほかに類ひなし。芸者、素人、子供にいたるまで、その真似るものおおし。天保十亥（1839）春狂言、中村座大名題『いわいうたそががおみせ』いわいうたそががおみせ『岩井歌曾我対面』第二ばん目大切取俄なり、江戸名所見立八葉の内のおまんか飴の身ぶり□□にて、翫廬（翫雀の間違い。四代目中村歌右衛門 1798-1852）より飴売に仕着いたし。是より大評判になりし。上るり（浄瑠璃）名題は『花翫曆色所八景』はなごよみいろのしよわけと記されている。歌舞伎が、市井の人気者となった飴売りの扮装と所作、それに特徴ある口上をいち早く取り入れたことに驚かされる。図は歌川国芳が描いた『花翫曆色所八景』の錦絵で、おまんが飴の飴売りに扮した中村歌右衛門である。



「花翫曆色所八景」おまんが飴

鎌倉節の飴売り

傘を立てた飴売りに扮した歌舞伎の演目もあった。それは文久元年に（1861）江戸市村座で初演された歌舞伎『東駅いろは日記』とうかいどうで、十三代目市村羽左衛門（1844-1903・後の五代目尾上菊五郎）が飴売千太郎（渦松）を演じたのである。飴を入れた抽斗付きの台上に鉦叩き人形を載せて台の脚に傘の柄を結びつけ、その傍らで三味線を弾きながら鎌倉節を歌い、紐を引いて人形に鉦を叩かせるといった趣向であった。

明治38年（1905）に刊行された『江戸府内絵本風俗往来』は、江戸時代の風俗を記しているが、その下巻に次のような経緯を記している。「此頃、俳優尾上菊五郎、市村羽左衛門といひし頃にて、此鎌倉節の評判の高きを聞て、舞台にて演じて見たく思立しかば此飴売を家に招き、よくも其節々を自得なし、猿若町二丁目市村座に於て演じけるが、是また大きに好評を得しかば、随て鎌倉節も市中にて又格別ひるきに愛顧せられて其評よく、羽左衛門よりは、己が紋所染出したる衣類を、寒暑両度、年々贈りしかば、其衣類を着て家業に出たりけるは、是また当人の誉なりし」

この鎌倉節を歌う飴売りに扮した市村羽左衛門を描いた浮世絵がいくつもある。

初代歌川芳艶（一英齋・1822-66）による文久元年（1861）の役者絵には、市村羽左衛門家の

定紋である「根上り橘」と替紋の「渦巻」を派手に染め抜いた藍染めの着物姿の羽左衛門が三味線を弾く姿を描いている。そして、その後ろには傘を結び付けた台があり、小さなからくり人形が載せられている。

「飴う里宇寿まつ」と題した羽左衛門の役者絵は、落合芳幾 (1833-1904) も描いているが、図中に「鎌倉ぶし」と題して、「本町二丁めの ナアヨ 本町二丁めの いとやのむすめ としハ二十一 いもとハはたち いもとほしさに ナアヨ りう願かけて いせへ七度 くまのへ三ど あたご様へ八月まいり (本町二丁目の、ナアヨ、本町二丁めの、糸屋の娘、歳ハ二十一、妹は二十歳、妹欲しさに、ナアヨ、立願かけて、伊勢へ七度、熊野へ三度、愛宕様へは月まいり)」という唄を記している。



歌川芳艶「飴売渦松」 落合芳幾「飴う里宇寿まつ」 歌川国明「飴売千太郎」 豊国三代「飴売千太郎」

同じ文久元年には歌川豊国三代 (1786-1865) が「飴売千太郎」という題で描いている。

慶応3年 (1867) に出版された『東海道一眼千両』は錦絵のシリーズ物で、人気歌舞役者を豊原国周 (1835-1900) が描き、背景の役者ゆかりの宿場を歌川広重二代目 (1826-69) が描いている。その『東海道一眼千両』保ヶ谷では、飴売千太郎を描いている。また、歌川国明 (生没年不詳) には「飴売千太郎 市村羽左衛門」と題した役者絵がある。よほど羽左衛門の飴売りは人気があったのだろう。

おわりに

現代の傘立て飴屋

以上述べてきたような傘を立てた飴売りは、現代に伝えられていないのだろうか。実は香川県に残っている。讃岐の金比羅宮である。365段の石段を登って大門を抜けると、5本の白い大傘が立つ平坦地に出る。大傘の下で商っているのが、金比羅名物「加美代飴」である。ただし、江戸の飴売りのように芸で人を集めることはしていない。金比羅宮境内で加美代飴を売ることができるのは「五人百姓」と呼ばれる5軒の飴屋だけである。先祖が御祭神の供奉をしていた功勞を称えられて、特別に境内での飴の販売を許されたのだという。加美代飴は水飴と砂糖、それに

柚子油で作られ、ほのかに柚子の香りのする飴である。扇形をした黄金色の透明な飴だが、歯で噛み割るには堅すぎる。そのため、飴と一緒についてくる金属製の小槌でたたき割って口に入れる。



讃岐金比羅宮の五人百姓

飴屋の傘と洒落

さて、行商の飴屋たちは、なぜ大傘を標識としたのだろうか。飴屋が貴人の系譜を引くとはとても思えないし、宗教的意味も見当たらない。

『守貞謾稿』に「今世、三都ともに傘下商人あり、昔よりこれありて、いづれの時始まるを知らず。大略、径り丈ばかり、高さこれに准ず大傘を路傍に栽て、その下にて商ふなり。故に、かさのしたと云ふ。行人多き所にこれあり。飴の類、路上商専らこれを用ふ。日光に飴の解けざるためと、急雨にもこれと同じきを要す故なり。他商も稀にこれを用ふなり。（中略）飴売りは、三都ともに、丈余の大傘を用ふれども、京阪、ただ傘の下と云ふは、かの酒店のこととす」とある。このように大傘の下で商売をするのは飴屋が多く、上方では酒屋も同様に傘を立てていたというのである。

傘の大きさが気になった。1丈は10尺なので、直径高さ共に3mの大傘である。絵画資料を見た限り、すべての飴屋がこのような巨大な大傘を立てていた訳ではないようである。ただ、その理由が日差しで飴が溶けるのを防ぐためとか、突然の雨にも対応するためだというのが、他の業種でも同様ではないのかと疑問に思った。なぜ、飴屋は傘を用いることが多いのだろう。「飴の類、路上商専らこれを用ふ」と書かれたように、傘を立てて商いをするのは飴屋だというイメージが強かった。しかし、史料を探したが、『守貞謾稿』以外にその理由を記したものを見つけることはできなかった。喜田川守貞は、露店の飴売りが傘を用いる物理的な理由を記した訳だが、それに納得することができない。そこで、なんらかの記号的な意味があったのではないかと考えるに至った。

あくまでも私個人の仮説ではあるが、江戸時代の人々ならば、容易に考えつくだらうと思われる解答がある。「雨（飴）には傘がつきもの」という解釈である。例えば、文化9年（1812）の『俳風柳多留』六二に「降る雨と 売る飴傘の上と下」(15)という川柳がある。同音の雨と飴、そして飴・傘と雨傘もかけた洒落である。上（空）から雨の降る中、雨傘の下で飴を売っているという意味である。洒落っ気を尊ぶ江戸の庶民文化の特徴から、このような仮説も充分ありえるだろう。

権力権威の象徴、あるいは神の依り代としての大傘は、次第にその意味性を変え、屋外における職種を表す標識の役割を持つようになっていたのである。飴屋の傘は、記号としての傘が庶民により一層身近になったことを物語っているように思える。

[註]

- (1) 『絵本 江戸の飴売り』花咲一男著・太平書屋・2004年。
- (2) 空也上人の鉢叩き念仏を起源とするという六斎念仏踊りは、京都市下京区中堂寺櫛笥町などで伝承されている芸能で、昭和58年(1983)に「京都の六斎念仏」として国重要無形民俗文化財に指定されている。

参考文献

- ・『西山宗因千句』西山宗因作・1649年：国際日本文化研究センター・公開データベース。
- ・『当世口まね笑』一笑軒作・1681年：武藤禎夫・岡雅彦編『咄本大系 第5巻』東京堂出版・1975年。
- ・『御府内備考』：『大日本地誌体系』巻1・雄山閣・1914年：国立国会図書館デジタルコレクション。
- ・『絵本江戸みやげ』西村重長画・1753年：国立国会図書館デジタルコレクション。
- ・『武江年表』斎藤月岑・1848年：国立国会図書館デジタルコレクション。
- ・『江戸名所図会』巻之三・長谷川雪旦画・1834年：『新訂 江戸名所図会』巻之三(ちくま学芸文庫)・筑摩書房・1996年。
- ・『名物鹿子』伍重軒露月編・1733年：国立国会図書館デジタルコレクション。
- ・『絵本御伽品鏡』長谷川光信画他作・1739年：国立国会図書館デジタルコレクション。
- ・『売飴上平伝』舩羅山人著・鈴木春信画・1769年：ARC 古典籍ポータルデータベース。
- ・『一蝶画譜』英一蝶原画・鈴鄰恣筆・1770年：国立国会図書館デジタルコレクション。
- ・『どうけ百人一首』恋川好町作・1793年：国立国会図書館デジタルコレクション。
- ・『昔語銚子浜』森羅亭万宝作・歌川豊国画・1793年：国立国会図書館デジタルコレクション。
- ・『絵本狂歌山満多山』大原亭炭方撰、葛飾北斎画・1804年：国立国会図書館デジタルコレクション。
- ・『今様職人尽歌合』近藤清春作・北尾政美画・1825年：国立国会図書館デジタルコレクション。
- ・『東都歳時記』冬五・斎藤月岑作・長谷川雪旦と長谷川雪堤画・1838年：国立国会図書館デジタルコレクション。
- ・『金儲花盛場』十返舎一九作画・1830年：国立国会図書館デジタルコレクション。
- ・『近世流行商人狂歌絵図』曲亭馬琴作・1830年頃：国立国会図書館デジタルコレクション。
- ・『豊歳銭塚之由来』柳川桂子作・1776年：新日本古典籍総合データベース。
- ・『盲文画話』水野廬朝作・1827年：国立国会図書館デジタルコレクション。
- ・『放屁論後編』風来山人(平賀源内)作・1777年：国立国会図書館デジタルコレクション。
- ・『職人尽絵詞』楸形蕙斎画・1801-03年頃：『楸形蕙斎画 近世職人尽絵詞—江戸の職人と風俗を読み解く—』大高洋司 小島道裕 大久保純一編・勉誠出版・2017。
- ・『燕石雑志』五巻・曲亭馬琴作：同志社大学デジタルコレクション。
- ・『嬉遊笑覧』巻十一・喜多村筠庭(信節)作・1830年：『燕石雑志 5巻』(岩波文庫)・岩波書店・2009年。
- ・『近世商賈尽狂歌合』石塚豊芥子作・1852年：『日本随筆大成』第三期4 第2巻(3)・吉川弘文館・1977年。
- ・『江戸府内絵本風俗往来』下巻・菊池貴一郎(芦乃葉散人)作・1905年：国立国会図書館デジタルコレクション。
- ・『守貞謄稿』喜多川守貞作・1837-1868年頃：『近世風俗志』一・(岩波文庫)・岩波書店・1996年。